貝原前兵庫県知事の悲報に接して

それは衝撃のひと言だった。「貝原前知事が交通事故で亡くなられた」。11 月 13 日夕、研究所に神戸新聞の記者からもたらされた一報に、わが耳を疑った。貝原さんには、10 月 3 日に災害復興学の授業で登壇していただいたばかりだった。11 月 14 日の授業では講師に黒田裕子さんを予定していたが、黒田さんも 9 月 24 日、肝臓がんで死去されており、14 日の授業では、はからずも大震災からの復興に貢献された二人の死を学生に伝えるはめとなった。

実は 10 月 3 日の授業のあとで、貝原さんに会食をお願いしていた。「創造的復興」について、確かめたいことがあったからだ。しかし、会食はその日の朝、突然、予定が入ったことでキャンセルされ、私の疑問は今なお未消化なまま、宙ぶらりんとなっている。

新潟県中越地震のあと、中越復興市民会議の中心メンバーだった稲垣文彦さんが、「軸ずらし」なる考え方を発表した。デフレスパイル下での災害復興は、高度経済成長時代のように常に右肩上がりの復興曲線を描くことはあり得ない。35 億円の税収しかない村に 1000 億円の復興予算を投じる経済効率の悪さに苛立ったのか、新潟県に寄せられた声の中には「山古志村を復興させる必要はない。一人ひとりに補償金を渡して山から下ろした方が良い」という乱暴なものもあった。メディアや研究者の間でも、過疎が進むムラに巨額の投資をする無駄を指摘し、平地にコンパクトシティをつくればよいとの提案もあった。

これに対し、「軸ずらし」なる考え方は、経済優先の考え方に異議を申し立て、復興曲線の縦軸を従来の経済指数や人口ではなく、地域の絆や暮らしの豊かさに置き換えようという価値観の転換を呼びかけるものだった。

ともすれば、開発指向として批判にさらされる貝原さんの創造的復興も、実は「都市復興の軸ずらし」ではなかったのか、というのが私のかねてからの考えだ。

復興事業を従来どおり大型公共事業のばらまきと大企業優先の財政出動を踏襲するだけでは、右

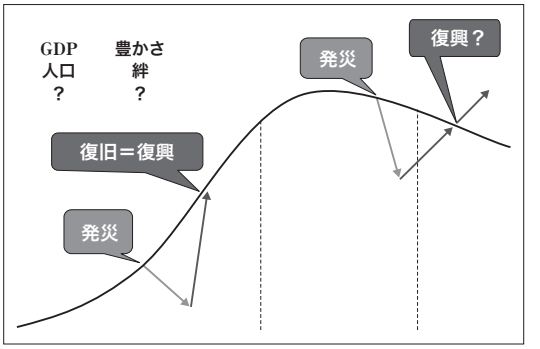

図 1　中越復興市民会議が提唱した軸ずらしの考え方

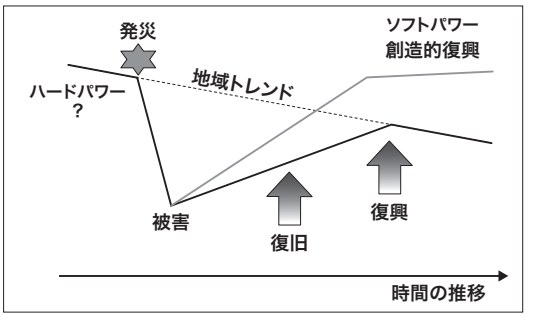

図 2　創造的復興の考え方

肩下がりとなっている都市成長のベクトルはせいぜい震災前と同レベルに回復するのがせきのやまだ。そこで、縦軸の目盛りを安心・安全というソフトパワーに置き換える。さらにいえば、「武力と経済開発」という 20 世紀型国家から「平和と安心･安全」という 21 世紀型国家への「軸ずらし」をはかる、というのが貝原さんの壮大な知恵だったのではなかろうか。しかし、「軸ずらし」を推進するための特区構想は頑迷な政府官僚によって潰され、柔軟な使い道を模索した復興基金も財政当局によって数々の制約を受け、貝原さんの志は道半ばになったのではないか。

そう考えなければ、あの日の貝原さんの笑顔が理解できないからだ。「あの日」――2010 年 1 月 9 日、震災 15 年を前にした研究所主催のシンポジウムに貝原さんの出演をお願いしていた。その直前、われわれは「災害復興基本法試案」を発表。原案は貝原さんの手元にもわたっていたし、当日朝には新聞紙上をにぎやかせていた。人間復興を基調に、ともすれば創造的復興を暗に批判するような内容だ。

どんな顔をして貝原さんに会おうかと思案しながら、会場に入ったところ、楽屋裏でばったり貝原さんに出くわした。「やったじゃないか」。貝原さんは、私の肩をぽんとたたいて、にこやかに笑われた。

あの日の笑顔は、どのような意味だったのか。「創造的復興」の私なりの解釈は正しかったのか。東日本大震災で大安売りされた「創造的復興」を貝原さんはどう思っていたのか。今となっては確かめようもない。

［日本災害復興学会誌『復興』12 号、2014 年 12 月に加筆］